

自然教育園におけるタカブシギ *Tringa glareola*の初記録と渡来時の 気象条件

濱 尾 章 二*

The first record of the Wood Sandpiper *Tringa glareola* and the weather condition on the arrival day

Shoji Hamao*

はじめに

自然教育園の鳥類については、1949年の開園以来確認された101種が動植物目録(国立科学博物館附属自然教育園 1984)としてまとめられている。その後も、数年ごとに観察記録が報告され(千羽・坂元 1985, 1989, 1992), 武藤(2001)はそれまでのすべての報告と自らの観察から在来種120種、外来種9種を記録している。

長期間にわたり高い頻度で観察が行われているため、稀な迷行などによる出現もほぼ記録されつくした感があり、近年は新しい種の記録は少なくなっている。最後の初記録種は1999年5月15日のマミジロキビタキ *Ficedula zanthopygia* である(武藤 2001)が、これはカワセミの終日記録用に設置されたビデオ(矢野 1994)の録画による発見であり、通常観察による初記録はかなり生じにくくなっている。

一方、初記録種についての記載を見ると、類似した種があるにもかかわらずそれと区別した同定の根拠が記されていないか、入園者が示した写真に基づく同定であったりする場合がある。このような記録は、後年疑義が生じる可能性がある。

今回、著者はタカブシギを自然教育園で初めて観察した。ここでは、この観察について同定の根拠、観察時の状況(気象条件)を記載し、初渡来が起きた理由を考察する。

稿を進めるに先立ち、自然教育園の気象データを提供して頂いた当園菅原十一主任研究官、写真を提供して頂いた谷英雄氏、気象データ・図の引用を許可して頂いた気象庁に御礼申し上げる。

タカブシギの同定及び観察時の行動

(1) 日時・場所

2004年9月1日9:00。イモリの池の泥地(図1)の上にいる。20 mほど距離から双眼鏡(×10)で観察

*国立科学博物館附属自然教育園, Institute for Nature Study, National Science Museum, Tokyo.

したが、すぐに水生植物園方向に飛去した。

2004年9月1日9:20。水生植物園の池の北部(図1)にいたが、10 mほどの距離で発見した瞬間に飛び立ち、イモリの池方向に飛去した。

2004年9月2日8:45。前日と同じ水生植物園の池の北部にいた。20 mほどの距離から双眼鏡で1分間ほど観察した。後述する行動や同定に関わる観察はこの際に行った。イモリの池方向に飛去した。

2004年9月3日8:40~9:20。水生植物園の池、イモリの池、水鳥の沼などを水辺に注意しつつ調査したが、タカブシギは見られなかった。それ以降も、毎日あるいは2日間に1度の頻度で園内を調査したが、タカブシギは観察されなかった。

渡来前の8月30、31日には観察を行っていないが、他の職員によってもタカブシギを観察したという情報はなかった。8月29日以前にはタカブシギは観察されなかった。

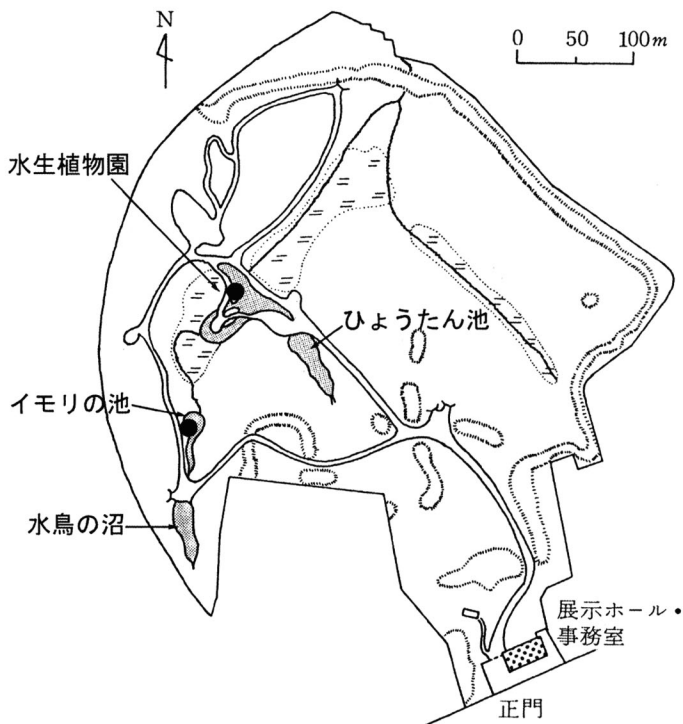


図1. タカブシギの観察地点

網かけの部分に池を、●印が観察された場所を示す

(2) 同定の根拠

タカブシギは背面褐色、下面白色で、黒く長い嘴を持った体長約21 cmのシギである(竹田 1996, 図2)。野外での同定では同属のクサシギ *T. ochropus* との区別が重要となる(小林 1976, 高野 1980)。今回観察した個体は、以下の点からタカブシギと同定された。

翼の下面：白っぽく淡色であった。クサシギでは暗色である(高野 1980)。

足の色：黄色味を帯びた淡緑色であった。クサシギでは青味を帯びた灰色で(竹田 1996)、タカ

ブシギより濃い色に、時に黒っぽく見えることもある (小林 1976, 高野 1980)。

上面 (背面)：背の白斑が大きく、背面が明るい色に見えた。クサシギの背面の白斑は小さい (高野 1980, 竹田 1996)。

眉斑：目の後ろまではっきりとした白い眉斑があった。クサシギの眉斑は、不明瞭で (WBSJ 1982) 短く、また白いアイリングがある (竹田 1996)。

これら以外の点では、両種の明らかな識別ポイントとは言えないが、クサシギ (全長24 cm) よりも小さく感じられたことや、体全体とのバランスで足が長く感じられたことも、観察した個体がタカブシギであることを示すものと言える。

なお、両種を区別するポイントの1つである声は、今回の観察を通じて聞かれなかった。また、尾から上尾筒にかけての白色部は飛翔時に確認できたが、両種で異なるとされる尾先端部の黒色部のパターンの違いは確認できなかった。

タカブシギは雌雄同色だが、夏羽では冬羽に比べて上面の白斑が明瞭になる (清棲 1965, 小林 1976, 竹田 1996)。多くの写真 (例えば、高野 1981, がりぞう 2005) と比較すると、今回観察された個体は背面の白斑が小さく、地の褐色部の色が淡く、夏羽ではない。しかし、冬羽の成鳥か、当年生まれの幼鳥であるかは区別がつかなかった。幼鳥では上面に淡い赤さび色の斑があるという記述もある (清棲 1965) が、それは明瞭なものではない (例えば、WBSJ 1982の図)。また、幼鳥の背面の白斑は成鳥冬羽よりも大きいという記述もある (森岡 1983) が、成鳥冬羽の個体変異も大きい (がりぞう 2005の写真を参照)。これらのことから、今回の観察からは両者のいずれであるかを断定することはできなかった。

今回の観察では、写真は撮影できなかった。



図2. タカブシギ. 谷英雄氏撮影.
今回の記録と写真の個体は無関係.

(3) 行動

観察した個体は、泥地の上を尾を上下に振りながら歩いていた。尾の振り方は、この行動をよく行うイソシギ *Actitis hypoleucos* ほど大きくはなかった。ヒト (観察者) が動くとき、ヒメガマの根元のヒトとは反対側に入り動かなくなった。ヒトが接近すると飛び去ったが、その時シギ類がよくするように声を発することはなかった。

渡来時の気象状況

(1) 2004年夏季の少雨

東京では2004年の夏は雨が少なく、6～8月の降水量は215.5 mmと過去10年間で最も少なかった(図3)。2004年について細かく見ると、6月が112.5 mm, 7月が23.5 mm, 8月が79.5 mmと、タカブシギが渡来する前2ヶ月間は降水量が大変少なかった(図4)。

この少雨のため、また外来魚駆逐作業(矢野ほか 2005)によって流入する水量が減少した影響もあり、水生植物園の池とイモリの池では水位が低下した。ただし、池が完全に干上がったわけではなく、池の周囲で底の泥地が現れ、乾燥してひび割れを起こす状態であった(図5)。泥地が広く現れた期間はあまり長くはなく、9月初旬の降雨(例えば4日に降水量78.5 mm)によって、タカブシギが見られた泥地は水面下に没した(図6)。

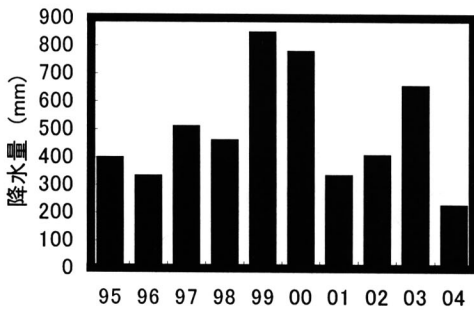


図3. 東京における6～8月の降水量の経年変化. 気象庁電子閲覧室のデータより作図.

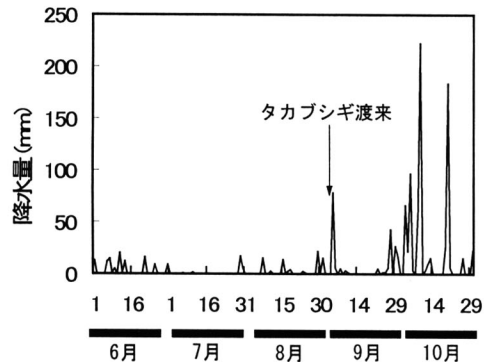


図4. 東京における2004年6～10月の降水量. 気象庁電子閲覧室のデータより作図.



図5. 水生植物園の池, 北側部分の渇水時の状況 (2004年9月2日撮影) .



図6. 水生植物園の池、北側部分の降雨後の状況 (2004年9月9日撮影)。
図5と同じ場所。

(2) 台風の接近

タカブシギ初認前日の8月31日、東京では台風16号の接近により強風が吹いた。この強風が鳥の迷行を招いた可能性があるため、渡来時及びその前後に接近した台風と強風について詳細を述べる。

図7に示したように、台風の接近時には東京でも強い風が記録され、特に台風16号は2004年6～10月の間で最も強い風をもたらした。自然教育園では気象庁の観測地点よりも最大瞬間風速が小さく記録される傾向があった (Wilcoxon検定, $n = 12$, $T = 0$, $P < 0.01$, 図8) が、両者の風速には強い相関があり ($r = 0.93$, $P < 0.0001$)、気象庁のデータは自然教育園での風速の変化を表している。台風16号が接近した8月31日には、自然教育園でも24.7 m/sの瞬間最大風速を記録した。

台風16号は、8月20日太平洋上で発生し、九州・中国地方に上陸した後、8月31日に日本海を北東に進んだ。北海道に再上陸した後、温帯低気圧に変わり北上した (図9)。この台風は強風を伴う「風台風」と言われ、東京に最も接近した8月31日には中心気圧975 hPaとあまり強くはなかったものの、速度が65 km/hと早かったこともあり、進路の東側にあたる東京では強風が記録された (図10)。

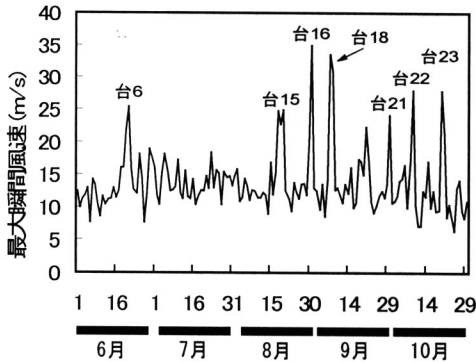


図7. 東京における2004年6~10月の瞬間最大風速. 気象庁電子閲覧室のデータより作図.

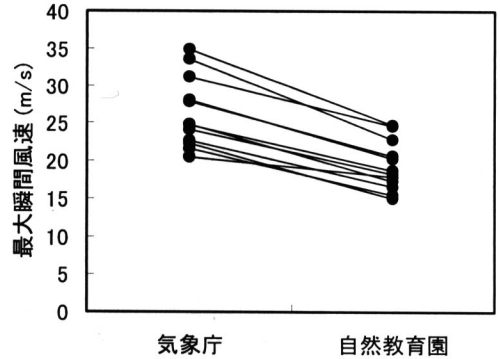


図8. 気象庁と自然教育園における風速の比較. 2004年6~10月の間, 気象庁で20 m/s以上の瞬間最大風速を記録した12日間のデータに基づく. 気象庁のデータは, 電子閲覧室による.

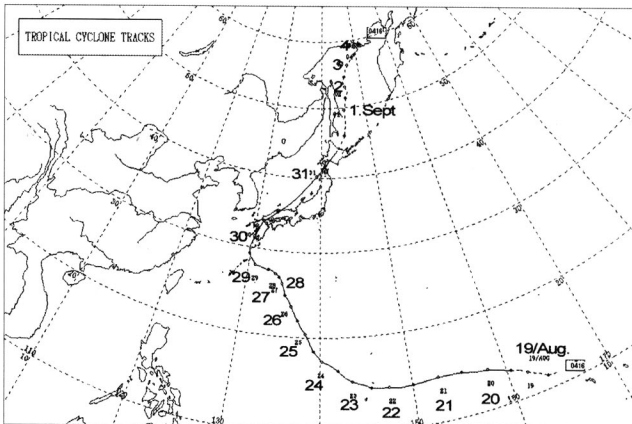


図9. 台風16号の経路. 数字は日付 (2004年). 気象庁電子閲覧室より引用.

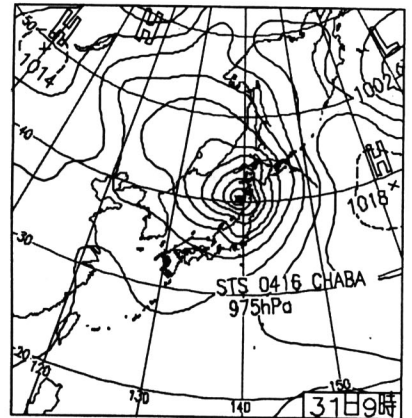


図10. 2004年8月31日9時の天気図. 気象庁電子閲覧室より引用.

考 察

タカブシギはユーラシア大陸北部で繁殖し, 冬はアフリカ, インド, 東南アジア, オーストラリアなどへ渡る (竹田 1996)。日本では, かつては春秋に通過する旅鳥とされた (清棲 1965, WBSJ 1982) が, 最近は越冬する個体も多いことが認められている (日本鳥学会 2000)。1980年代から越冬する例が増えたようである (例えば, 新倉 1985)。タカブシギは, 1960年前後に渡来数が大きく増加したとも言われ (高野 1967), 分布や渡来ルートが変化しやすい種なのかも知れない。いずれにしても, 8月以降は冬季まで, 東京周辺では珍しい鳥ではない。

タカブシギは国内では, 干拓地, 湿地, 農耕地, 河川, 河口部などに生息し (日本鳥学会 2000),

干潟や浅い泥質の水たまりで水生昆虫やミミズを採食する(清棲 1965, 竹田 1996)。ところが、自然教育園には泥質の湿地はない。2004年の夏は極端な少雨と、外来魚駆除のため上流の池からの水の流入が途絶えたことにより池の周辺部に泥地が現れた。泥地が出現したことが今回タカブシギの渡来を招いた要因の一つであることは間違いない。自然教育園ではシギ科Scolopacidaeは今までにイソシギ, ヤマシギ*Scolopax rusticola*, タシギ*Gallinago gallinago*の3種しか記録されておらず(武藤 2001), しかもその中に泥地を好むものはいない。このことも、2004年に珍しく生じた泥地の出現が、タカブシギの渡来を招いたことを示唆している。

また、タカブシギ初認の前日には台風による強風が吹いていた。強風で運ばれた鳥が台風の通過後に発見される例は多い。今回も、強風という条件がなければ、都心の隔離された森林の中にある狭い泥地にタカブシギが飛来することはなかったものと考えられる。

泥地の出現と台風の強風という条件が、秋の渡りの時期に生じたことも重要であろう。タカブシギは越冬する例が増えたとはいうものの、多くは南方に渡り去る旅鳥であり、日本では秋季に個体数が多くなるものと考えられる。しかも、越冬個体は広い範囲を移動せず、強風に運ばれることは少ないと考えられる。今回の渡来は、時期的な条件(渡りの時期)、生息環境の条件(泥地の出現)、至近的な気象条件(強風)が重なって起きたものであろう。

要 約

2004年9月2日と3日、自然教育園で初めてタカブシギを観察した。翼下面の淡色、黄色味のある淡緑色の足、上面の白斑、明瞭な眉斑から類似するクサシギではないと判断した。2004年、特にタカブシギが渡来する前2ヶ月間は降水量が少なく、園内の池の水量が減り周辺部に泥地が出現していた。また、タカブシギ初認の前日には台風が接近し強風が吹いていた。これらのことから、秋の渡りの時期に強風に運ばれた個体が、泥地が現れていたために飛来したと考えられた。

文 献

- 千羽晋示・坂元直樹. 1985. 自然教育園の鳥類(1982~1984). 自然教育園報告, (16): 75-82.
- 千羽晋示・坂元直樹. 1989. 自然教育園の鳥類(1985~1988). 自然教育園報告, (20): 15-19.
- 千羽晋示・坂元直樹. 1992. 自然教育園の鳥類(1988~1991). 自然教育園報告, (23): 1-9.
- がりぞう. 2005. Yahoo!!オンライン野鳥図鑑. <http://www.gt-works.com/yachoo/> (2005年1月20日ダウンロード).
- 気象庁. 2004. 気象庁電子閲覧室. <http://www.data.kishou.go.jp/> (2004年12月25日ダウンロード).
- 清棲幸保. 1965. 増補新訂版, 日本鳥類大図鑑Ⅱ. 講談社, 東京.
- 国立科学博物館附属自然教育園. 1984. 国立科学博物館附属自然教育園, 動植物目録. 国立科学博物館附属自然教育園, 東京.
- 小林桂助. 1976. 原色日本鳥類図鑑—増補改訂新版—. 保育社, 大阪.
- 日本鳥学会. 2000. 日本鳥類目録改訂第6版. 日本鳥学会, 帯広.
- 森岡照明. 1983. 野外観察ハンドブック2, 水辺の野鳥, 4訂版. 日本野鳥の会, 東京.

- 武藤幹生. 2001. 自然教育園の鳥類の種構成について. 自然教育園報告, (33): 153-166.
- 新倉三佐雄. 1985. 茅ヶ崎市におけるタカブシギ *Tringa glareola* 小群の越冬について. Strix 4: 56-57.
- 高野伸二. 1967. 原色・自然の手帖, 野鳥. 講談社, 東京.
- 高野伸二. 1980. 野鳥識別ハンドブック. 日本野鳥の会, 東京.
- 高野伸二. 1981. 日本産鳥類図鑑. 東海大学出版会, 東京.
- 竹田伸一. 1996. イソシギ. (樋口広芳・森岡弘之・山岸哲編) 日本動物大百科第3巻鳥類 I. pp. 99-100. 平凡社, 東京.
- 谷英雄. 2005. 鳥通路写真館. <http://bird.incoming.jp/> (2005年1月21日ダウンロード) .
- WBSJ (Wild Bird Society of Japan). 1982. *A Field Guide to the Birds of Japan*. WBSJ, Tokyo.
- 矢野亮. 1994. 自然教育園におけるカワセミの繁殖について (第2報) . 自然教育園報告, (25): 1-28.
- 矢野亮・大澤陽一郎・奥津励・桑原香弥美. 2005. 自然教育園におけるブルーギル・オオクチバスの密放流から駆除まで. 自然教育園報告, (36): 9-20.

Summary

I observed a Wood Sandpiper *Tringa glareola* during 2-3 September 2004. This is the first record of this species in the Institute for Nature Study. As this species is similar to the Green Sandpiper *T. ochropus*, I distinguished the observed bird from the Green Sandpiper by white underwing, yellowish legs, back with white spots, and clear eyebrow. Because of less rainfall during the summer in 2004, water level in ponds in the Institute lowered, and muddy places appeared around them. On the previous day of the arrival, a typhoon produced strong wind. Under these conditions, the bird that are migrating and passing Tokyo area would accidentally arrived at the Institute.